

百人一首ゆかりの地 福知山

「人はいさ 心も知らず ふるさとは

(平安中期905年頃)

花ぞ昔の 香ににほひける」⁽³⁵⁾ 紀貫之 (古今和歌集選者の1人)

(あなたはさあいかげでしょうか。あなたの心ははかりかねます。でも、懐かしいふる里の花は、さすがに変わらず、昔のままに咲き香(さきかお)って迎えてくれますね・・・)

紀貫之(きのつらゆき)は、平安時代中期の代表的歌人で、貞観年間(875年頃)紀望行の子として生まれました。なお、百人一首の「久方の 光のどけき 春の日に しづこころなく花の散らむ」(33)の句を諷んだ紀友則は、貫之の従兄弟にあたります。貫之は、醍醐天皇の命により、紀友則らとともに最初の勅撰和歌集である「古今和歌集」の編纂に携わりました。また、土佐国司として赴任した時の出来事を元に「土佐日記」を記しましたが、日本文学史上最初のひらがなによる文学であり、その後の日記文学や随筆、女流文学の発達に大きな影響を与えました。

福知山市三和町菟原下にある梅田神社、友淵の春日神社、高杉の春日神社、多紀郡草山村本郷(現在の兵庫県篠山市)の梅田春日神社、同郡藤坂村(現篠山市)の梅田社、同郡小原村(現篠山市)の梅田七社としい、いずれも祭神として天児屋根命(あまこやねのみこと)、彦太忍信命(ひこぶとおしのみこと)、そして紀貫之が祀られています。(梅田神社明細帳による)

天児屋根命は、天照大神が天岩戸に身を隠した際、天照大神を引き出すために岩戸の前で祈禱をしたことで知られ、中臣氏(藤原氏)の祖神として奈良の春日大社などにも祀られている神様です。

彦太忍信命(あるいは彦布都御信命とも表記)は、第8代孝元天皇の皇子で、武内宿禰の祖父にあたり、さらに紀貫之や紀友則といった紀氏の祖とされています。

福知山市三和町菟原の梅田神社は文治5年(1189)、紀氏の子孫である紀太成雄という人がこの地に紀氏の祖先の彦太押信命を祀った神祠を建立したのが始まりとされています。現在の社殿は、19世紀中頃に災禍にあり再建されたもので、二棟の社殿を並べて接続させた「連棟式社殿」という珍しいつくりで、右に梅田社、左に春日社がありどちらも当時としてはかなり贅を尽くした細かな彫刻が施されています。

三和町中出の梅田神社は、紀氏の一族である紀忠通を祀り、貞享5(1688)年に再建された現在の社殿は京都府の登録文化財に指定されています。なお、紀忠通は寛弘2年(1005)この地に流されましたが和泉式部の夫となる藤原保昌は忠通にあうためにこの地を訪れたといわれています。その子孫が室町時代初期になって当時の有力守護細川頼之に見出されて功績を挙げ苗字の一時をもらって細見大丞と名乗り、菟原・多紀あわせて16か村を支配したといわれています。

三和町菟原中にある龍源寺の境内に接して、菅原道真を祀る八幡神社があり、社殿には紀貫之を描いた絵馬が奉納されています。



細見中出の梅田神社



菟原の梅田神社



菟原の八幡神社



紀貫之の絵馬



友淵 春日神社

紀貫之と梅田神社